

—特集〔周産期医療の展望：日本医科大学武蔵小杉病院における周産期医療体制（1）〕—



巻頭言

鈴木 俊治

日本医科大学女性生殖発達病態学

日本医科大学武蔵小杉病院は、1937年に日本医科大学付属丸子病院として開設され、2006年に地域密着した現名称にかわり、そして、2021年9月に現在の新病院に移転しました。武蔵小杉病院は、若い人たちに人気のタワーマンションが連立する川崎市中原区において、安全で質の高い医療を提供する診療科17科（許可病床数372）の地域中核病院です。救命救急センター（CCM）や集中治療室（ICU/CCU）を擁するだけでなく、新生児集中治療病床（NICU）15床を要する地域周産期母子医療センターとして、出産前後の母体および胎児・新生児・小児に対して高度で専門的な医療を提供できる機能も整備されています。さらに、小児外科手術が必要となった場合も、常勤の専門医と連携して対応することが可能です。

妊娠・分娩・育児期の医療およびケアは、安全性と快適性のバランスが重要です。わが国の分娩の約半数は、快適性を求めて診療所で行われているのが実状です。確かに全妊娠の60～70%は、医療介入が全くなくとも無事に経過して自然分娩となりますが、一方、いつでも誰にでも予期せぬ急変となる可能性が潜んでいます。そして、わが国の周産期を取り巻く環境自体が、ハイリスク妊産婦の増加やニーズの多様化、さらには

産婦人科医・新生児科医の不足等によって、多くの課題が山積しているのが実状です。そのような背景のもと、周産期母子医療センターが各妊産婦の安全性と快適性を保証できるためには、急変に対して「備える」医療体制の確立が必須であり、そのためには、周産期合併症や異常に対するシミュレーションを繰り返して実施し、地域の診療所等のバックアップを十分に賄える体制の構築等が求められます。

日本医科大学武蔵小杉病院では、新病院に移転するにあたって、周産期母子医療センターとして地域中核病院に求められる役割を改めて意識した診療体制を構築しました。今回、その中心となったスタッフに、「周産期医療の展望：日本医科大学武蔵小杉病院における周産期医療体制」というテーマで、新病院医療体制を例にあげながら、主として産科救急、無痛分娩、出生前診断、そして新生児医療という視点から、わが国の周産期医療の展望を概説してもらうことを企画しました。

新病院の医療体制を文章化することが、これからの周産期・小児医療を担う世代の道標となり、未来につながる周産期・小児医療の確立および母子の心身の健康に貢献できることを願っております。